

好ムモノハ多ケレド、香道ハ大ニ衰ヘタリ、

聞香ニ用キル具ニハ、香合、火取、香箸等アリ、而シテ容飾ニ用キル香囊、匂袋ノ如キハ、器用部容飾具篇ニ收メ、又佛事ノ行香ノ如キハ、宗教部法會篇ニ收メタリ、

〔槐記〕享保九年十一月廿四日、御香アリ、香ヲ聞ト云コト、唐ニテモ、香、臭トモニ嗅コトヲ聞ト云、和朝ニテキクト云ハ、耳ニカギリテ云、唐ニテ聞ト云ハ、キクコトニモ、カグコトニモ用タリ、古キ朗詠集ナドニ、聞香ノ字ハ昔ヨリ古キ點付ノ好本ニハ、聞香ト付タリ、御前家照近衛ニモヨミ習ハセラレタリ、

〔玉勝間七〕香をきくといふは俗言なる事

香を聞といふは、もとからことにて、古の詞にあらず、すべて物の香は薰物などをかぐといふぞ、雅言にて、古今集の歌などにも、花たちばなの香をかげばと見え、源氏物語の梅枝巻に、たき物共のおとりまさりを、兵部卿宮の論め給ふところにも、人々の心々に合せ給へる深き淺さを、かざあはせ給へるになどこそ見えたれ、聞といへる事は、昔の書に見えたることなし、今の世の人は、そをばえらで、香などをかぐといはむは、いやしき詞のごと心得ためるは、中々のひがごと也、きくといふぞ俗言には有ける、

〔十種香暗部山一〕凡例

一香書にきくと云字を、鼻にきくは耳に聞に異なりとて、古人心々に沙汰して、馥嗅、嗅の字などか、れし、さも有べき事なり、然れども此書に聞の字を用る事は、童蒙の便に、えたがひ、事のやすきにつくのみ、えかのみならず、法華の偈、止觀の文、その外史書杜少陵が詩まで、みな聞香とあるにもとづけり、

〔嬉遊笑覽十下〕嗅 今鼻にきくと云は、家語に入芝蘭室、久而不聞其香、即與之化矣などいへり、故